

8:45 授業開始



授業は原則、オール・イングリッシュ。まず、冬休みの思い出を伝え合うペアワークを行い、先生に指名された生徒数人が、自分のパートナーが話した思い出を発表した。そのねらいは、相手の話に注意深く耳を傾け、理解した内容を要約し、主語や代名詞を適切に変えて説明することを通じて、状況をしっかり捉えて英語で話す力を育成することにある。

授業
ハイライト

●2年生「コミュニケーション英語」の授業。過去分詞を用いた後置修飾や関係詞の用法を身につけながら、キング牧師の演説内容を読む。平和や差別についての考えを深めていき、ペアワークなどで自らの考えを発信。（P.27に授業デザインを掲載）

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

英語

目の前の場面を見て、聞いて、
本気で考え、表現する過程で、
自然と英語を使う力を育てる

生徒が思考をフル回転させる
「大変だけれど楽しい」授業

三原先生のアクティブ・ラーニング

名古屋経済大学市邨中学校・高校には、中学校時代に英語に苦手意識を持っていた生徒が比較的多い。三原美樹先生は生徒に英語を好きになってほしいと考えて指導法を模索し、2014年にGDM (Graded Direct Method / 段階的直接法) に出合った。以降、愛知文教



愛知県・私立
名古屋経済大学市邨中学校・高校
三原美樹 みはら・みき

教職歴11年。
同校に赴任して10年目。
アクティブ・ラーニングの実践は3年目になる。

名古屋経済大学市邨中学校・高校

◎名古屋女子商業学校として開校。2002年に現校名に改称し、男女共学化、全コース普通科となる。建学の精神「一に人物、二に伎倆」を掲げ、全人教育を推進。特進、文理、キャリアデザインの3コースを設置し、生徒の多様な進路に対応。

◎設立 1907(明治40)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約350人

◎2016年度入試合格実績(現役のみ)

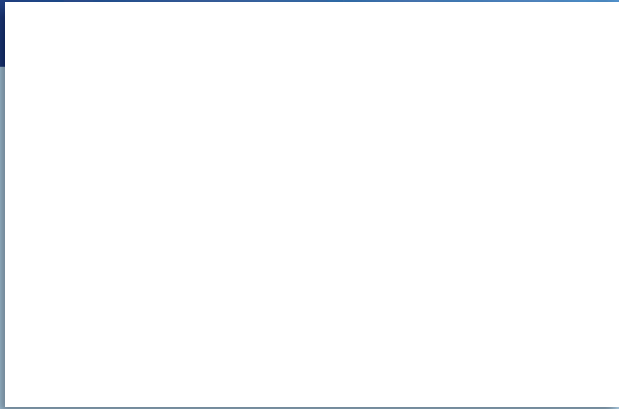
国公立大は、信州大、大阪教育大、愛知県立大、名桜大に4人が合格。私立大は、津田塾大、法政大、明治大、立教大、関西大などに延べ271人が合格。

◎URL

<http://www.ichimura.ed.jp/high/>

*プロフィールは2017年3月時点のものです

9:03 関係詞の学習



生徒同士で“Which country do you want to live?”と問いかけ、自分の考えを述べ合うペアワークを実施。先生が関係詞“where”を使った例文を示すと、生徒は、“Sweden is a country where there are many beautiful places. So I want to live in Sweden.”などと、関係詞を用いて自分が住みたい国について説明し合った。

8:53 後置修飾の学習



先生が富士山を訪れた話をした上で、富士山の写真3枚を掲示。ペアワークで“Which picture of Mt.Fuji do you like the best?”“I like the picture of Mt.Fuji taken in the morning the best.”といった応答を繰り返し、分詞“taken”による後置修飾の用法を理解させる。次に、富士山に関する名言を紹介し、同様に“spoken”を用いた後置修飾の用法の定着を図った。

大学の松浦克己講師の指導の下、校内の教師とともに研究と実践を進めている。

GDMの特徴の1つは、英語が自然と身につくように、教材や教え方が段階を追っていること(Graded)だ。15年度は、1年生を対象にGDMの段階的なカリキュラムを土台として、中学校英語の内容を総復習した。授業は原則、英語で進める。文法用語を使った日本語による説明はせず、直接英語のまま(Direct)理解させていく。三原先生は生徒の様子をこう語る。

「GDMでは、教えられたことを覚えるのではなく、英語をしっかりと聞き、自分で使う中で、理解しようと努める必要があります。授業中は思考をフル回転させなくてはならず、当初は生徒から『大変だ』『疲れる』といった声が聞かれました。それでも1年間続けると、英語で話せるようになり、『自分が話せるようになるなんて』といった喜びの声に変わっていききました」

思考の活性化・深化への配慮

文法事項は説明せず、英語を 実際に聞いて使う中で理解させる

この日の授業も、GDMの教授法に沿って進められた。教科書本文のキング牧師の演説内容を読んで考えを深めるためには、後置修飾や関係詞“where”を理解する必要があった。三原先生は、文法事項については一切説明せず、実際に英語を使うことを通して理解させていった。

後置修飾に関しては、先生が冬休みに訪れた富士山に関連させて、異なる時間帯に撮影された3枚の富士山の写真を示し、それらについて、生徒に“‘That picture was taken in the morning.’や‘That picture was taken at night.’などと発言させた。そして、‘Which picture of Mt.Fuji do you like the best?’と質問。夕焼けの富士山の写真が気に入った生徒は、‘I like the picture taken in the evening the best.’と、分詞“taken”を適切に使って答える必要があり、最初は正しく答えられなくても、試行錯誤して発言する中で正しい使い方を理解していった。

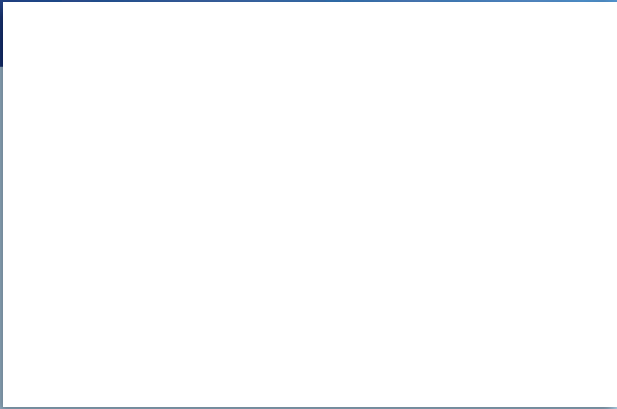
「おそらく生徒の頭の中には、‘taken’だけでなく‘took’‘taking’‘to take’なども出てきて、どう表現すればよいかと考えます。自分で選んで使った相手の反応を見たり、教師やほかの生徒の発話を聞いたりする中で、生徒自身がルールや意味をつかめるようにすることが、GDMの肝です。一人ひとりの頭の中で、アクティブ・ラーニングが確実に起きています」と

その後、関係詞“where”の使い方も、生徒は“Which country do you want to live?”という問いへの考えを伝え合う活動を通して、実際に聞いたり使ったりして理解を深めていった。

生徒の関心に沿った副教材を用いて 生徒の心を動かし、思考につなげる

そのようにして文法事項を習得しながら、キング牧師の演説内容を読み込んでいくが、単元

9:27 自分の考えを表現



プリントの“*What kind of world do you want to live?*”という問いに対して、各自が関係詞“*where*”を用いて自分の考えを記述。表現方法や単語について、生徒たちが相談し合う姿も見られた。その後、指名された数人の生徒が“*I want to live in a world where everyone can have enough food.*”などと発表した。

9:16 リスニングと音読



教科書の本文のリスニングとペアでの音読をした後、キング牧師が行った演説の実際の映像とテキストをスクリーンに映し出して改めて音読。新出の表現や単語も、ペアで確認した。



動画や音楽などを見たり聞いたりしながら話すので、アウトプットとインプットを同時に行う練習になっています。瞬間的に英語が出てくる力もついてきました。

を通して、教科書以外にも平和や差別などを扱った様々な教材に触れ、ペアワークなどを通して、自分の考えを深めてきた。単元の集大成となる今回の授業では、キング牧師が行った演説の実際の動画を見た上で、世界平和をテーマとしたジョン・レノンの曲「*Imagine*」を歌うレディー・ガガの動画も視聴した。三原先生は、これを単元の目標達成に重要な活動と位置づけており、生徒の様子を次のように話す。

「キング牧師の演説と『*Imagine*』の歌詞それぞれの英文を頭の中で比べながら聞いて、表現は違っても願いやメッセージは同じであることを、日本語に訳すことなく理解し、感じ取っていました。そして、彼らの人々に訴える様子を実際に見て、その切実なメッセージを受け止めて涙を流している生徒もいました。単なる英語学習のための英文ではなく、現実問題として平和や差別についての考えを深めるきっかけになったと思います。感じるものが大きいほど、イメージが膨らみ、自分の考えを書いて伝え合う活動では表現が豊かになっていきます」

授業の最後の“*What kind of world do you want to live?*”とどう問うには、生徒が自身の問題意識を基に、飢餓や移民、教育の平等性など、様々な意見を提示した。

「この生徒も、関係詞の“*where*”を用いて表現していました。もっとも、生徒の多くは、今回の授業で関係詞を勉強しているとは思っておらず、平和や差別について考えて表現するこ

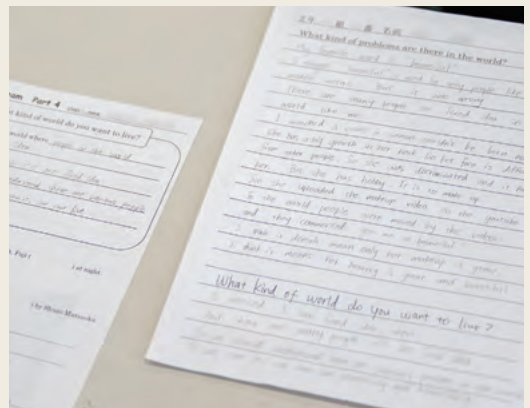
とが目的だと捉えていたと思います」

生徒からは、「演説内容を読み、映像を見て、自分でも調べて意見をまとめたことで、他人事を感じていた差別について、ニュースなどでも意識するようになりました」という声もあった。

場づくりへの配慮

ペアワークを頻繁に取り入れ、話すことへの抵抗感をなくす

GDMでは、生徒は曖昧な理解の状態から実際に使っていく中で、次第にポイントをつかんでいく。そのため、失敗を恐れずに発言できる雰囲気づくりが欠かせない。そこで、三原先生はペアワークを多用している。2人であれば意見を伝えやすく、一度話した内容は全体に向けても発表しやすくなる。さらに、複数の場面を準備することで、生徒の発言量を多くしている。



授業を通して生徒の思考が深まったことは、最後のライティングの記述量が非常に多いことにも表れていた。毎回、先生は一人ひとりのプリントをチェックし、文法事項の理解度を把握して次の授業に生かす。

授業デザインシート

【教科・科目】コミュニケーション英語

【設定時数】8時間中の7時間目

【分野・単元】分詞の後置修飾と、関係副詞 where の用法

【本時全体の目標】分詞の後置修飾と関係副詞 where の用法を理解するとともに、キング牧師の演説などを通して、平和や差別について考える

【テーマ・作品】マーティン・ルーサー・キング・ジュニア

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標(身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
分詞の後置修飾と関係副詞 where の用法	<ul style="list-style-type: none"> • 目の前のいろいろな状況から帰納法的に take, speak を正しい形にして文の中で使うことができる。 • 疑問詞 where を関係詞として用い、必要な情報をつけ加えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 知識 • 思考力 • 判断力 • 表現力 • 主体性 • 協働性 	<p>【教師】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 冬休みの出来事についてペアで伝え合わせる。 • 過去分詞 taken を用いないと区別することができない日の出、夕焼け、夜景の3枚の富士山の写真を見せ、どれが好きかを発表させる。 • 次に、富士山にまつわる有名な言葉を紹介して、spoken を正しく使って表現させる。 • 行きたい国や住みたい国を話し合わせ、それを関係詞 where を使って表現させる。 <p>【生徒】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 自分が一番好きな富士山の写真を過去分詞 taken を用いて伝えることができる。 • 行きたい国とその理由について、関係詞 where を使ってまとめながら言うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 和文英訳ではなく、taken ～、spoken ～といった過去分詞句をつけ加える必要がある状況から英文を作らせる。 • “Which picture of Mt. Fuji do you like the best?” • “I like the picture of Mt. Fuji taken in the morning the best.” • ほかの生徒の発表を自分のものと比べながら聞かせる。 • 常に生徒は自分の立場で発言する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 文法用語を使った説明や日本語訳を用いることなく、目の前の事実や自分の考えを英語で伝え合う活動を通してコミュニケーション能力を高める。 • シンプルでクリアな場面づくりを心がける。 • 自分の考えや分からない点を安心して聞き合える雰囲気になるようサポートする。
キング牧師による演説、教科書本文	<ul style="list-style-type: none"> • キング牧師の演説内容を読み、動画を見る。キング牧師と聴衆とが一体となって黒人の権利を勝ち取ろうとする姿を見ることで、人間の尊厳について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> • 知識 • 思考力 • 判断力 • 表現力 • 協働性 	<p>【生徒】</p> <ul style="list-style-type: none"> • ペアで本文を読み合い、単語チェックをし、内容を考える。文字だけでなく、動画で本物の演説を見ることで、その場の臨場感を体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 教師主導ではなく、生徒のペアでの活動を通して内容理解、思考を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> • 間違えても恥ずかしくない、安心して聞き合い、助け合い、英語をどんどん発することができる雰囲気になるようサポートする。
世界にはどのような問題があるのか、自分なりの意見を言う	<ul style="list-style-type: none"> • 身の回りのことから世界の国々まで、各自が問題だと思うことについて考え、英語で表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 知識 • 技能 • 思考力 • 判断力 • 表現力 • 主体性 • 協働性 • 多様性 	<ul style="list-style-type: none"> • 2学期から人種差別、アイデンティティーなどの問題について読み、考え、調べ、英語で表現するという活動を続けている。本時では、関係副詞 where を用い、“I want to live in a world where _____” で表現する。 		<ul style="list-style-type: none"> • 自分の思いを英語で表現できるよう、個別にサポートする。

*三原先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

成果と課題

生徒はたくさん話す中で間違えることも多いが、三原先生はそれを指摘しないため、恥ずかしいという感覚は持たなくなるといふ。

4 技能を測る外部検定試験で生徒一人ひとりの伸びを評価

定期考査は教科書の内容を復習すれば正解できる問題も出題するが、学んだテーマに関連した別の初見の文章を読ませて内容を問うリーディング問題や、そのテーマについて自分の意見を表現したり、学んだ表現を使ってストーリーを作ったりするライティング問題を出題するなど、暗記に頼らず考察させることに重点を置く。時には辞書・教科書・ノートを持ち込み可とする場合もある。

そうした授業改革の成果は、スピーキングを含めて4技能の伸びを客観的に測定するベネッセの「GTEC for STUDENTS」のスコアや各種検定の上位級の取得結果にも着実に表れた。

現在、同校では、3年間を通じた指導計画、CAN-DOリスト、ルーブリックを作成中で、指導と評価を一体化させて授業改善を行うサイクルを機能させたいと考えている。

「生徒には、英語が好きになり得意になるにつれて、世界が広がることを実感してほしいと思っています。これからは生徒が本気で考え、語る場面を多く設け、英語力だけでなく、人間力を高める学びを築いていきたいと思っています」